

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二主日C年

小西広志

2022年1月16日

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。先週は体調が悪く、動画の作成を一回お休みさせていただきました。先週発表できなかった年間第二主日C年の三つの朗読の箇所をシノドス的な教会の視点から読んで味わっていきましょう。

今年は主日のミサの朗読配分がC年となっております。主日のミサの朗読箇所は三年周期であることは、皆さまご承知のことでしょう。A年では福音朗読では主に『マルコによる福音書』が読まれます。B年では福音朗読は主に『マタイによる福音書』から採られています。そして今年、C年は『ルカによる福音書』が読まれることになっています。

しかし、年間第二主日だけは伝統的に『ヨハネによる福音書』のカナの婚礼の箇所と、他に同じ福音書からの二つの箇所が読まれます。つまりA年は1章29 - 34節、B年は1章35 - 42節です。これは、ヨルダン川で洗礼をお受けになられた「神から愛された神の子イエス」が、さらにどういった方であるかを他の人々の証言から明らかにする意図があります。さらに、そのイエスとの交わりの様子も証しされます。ですから、年間第二主日は「証し」の主日といえるでしょう。

あなたの神はあなたを喜びとされる

今日の第一朗読は『イザヤ書』からです。『イザヤ書』は長い時代背景の中で成立した文書です。今日朗読されているのは第三イザヤと通称呼ばれている作者、あるいは作者たちによって書かれた箇所です。第三イザヤは56 - 66章で展開しますが、時代は紀元前6世紀末から紀元前5世紀初頭にかけてです。場所はエルサレムとなります。捕囚の地から帰還したイスラエルの民は、自分たちに約束されていた栄光がなかなか現れないという現実に直面し、生きる希望を失っていました。こうして神さまへの信頼は弱まってしまいます。せっかく神さまが捕囚の地から導いてくださったにも関わらず、神さまから離れた生活を生き始めるのです。イスラエルの民は宗教的な指導者を必要としていました。

今日の朗読の最後の箇所「あなたの神はあなたを喜びとされる」（イザ62章5節）は、先週、主の洗礼の主日で福音朗読にあった「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（ルカ3章22節）を思い起こさせます。まるで、二つの聖書の箇所は互いに響き合っているかのようです。「適う」には喜ぶの意味もありました。神さまから愛された子は、神さまにとって喜びなのです。

霊は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです

もう一度、1月16日、年間第二主日C年の朗読箇所に戻りましょう。第二朗読では最後の言葉「霊は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです」(1コリ12章11節)に注目したいものです。

「賜物にはいろいろありますが」(4節)と今日の第二朗読は始まります。賜物はギリシア語で「カリスマ」と言います。これは恵みを表す「カリス」から派生した言葉だそうです。9節で「力」と訳されているのも、ギリシア語の原文は「カリスマ」です。フランシスコ会訳では「特別な恵み」としています。この「カリスマ」は一つの同じ霊に由来します。しかも7節にあるように「一人一人に」現れます。そして、それぞれ異なる働きを人に与えます。8節以下ではその働きが列挙されているのです。知恵のある言葉、信仰、病気をいやす力、奇跡を行う力、預言する力、霊を見分ける力、異言を語り、解釈する力です。

そして、「霊は望むままに」(12節)、それらの「カリスマ」を分け与えてくれるのです。神からの賜物、特別な恵みは、一人ひとりに応じて分け与えてもらえるのです。

弟子たちはイエスを信じた

福音朗読の箇所はカナの婚礼の場面です。マリアさまの一言「ぶどう酒がなくなりました」(ヨハ2章3節)は、最初に味わいたい一言です。直訳すると「ぶどう酒をもっていません」となります。当時の婚礼の宴会は大きなイベントで、招待する側は人々に食べ物や飲み物を十二分に行きわたるように配慮したそうです。そのために宴会の世話役を雇ったそうです。ぶどう酒がないというのは一大事で、宴会に出席した人々をガッカリさせてしまいます。マリアさまの心配りは細やかです。ぶどう酒がなくなると皆がガッカリする、そうしたら婚礼の宴会に招いた花婿と花嫁の面目は丸つぶれになる。そんな事態を避けるために、あらかじめイエスさまにそっと伝えたのでしょう。「あの人たちは、ぶどう酒をもっていません」。ぶどう酒を救いのシンボルととらえて、「救いをもっていません」と読み込むこともできます。しかし、それは読み込み過ぎかもしれません。

さて、福音朗読の最後の言葉に注目しましょう。「それで、弟子たちはイエスを信じた」(11節)。イエスさまがカナで行ったのは「しるし」です。「しるし」は何かを指し示します。イエスさまがなさった「しるし」も何かをわたしたちに示しています。その「しるし」を見て、「しるし」に触れて、わたしたちはイエスさまがどなたであるかを分かるようになるのです。

まとめ

カナの婚礼の箇所を読むと、この物語で自分はどんな立場にいるのだろうかと考えます。婚礼を祝うお客さんでしょうか。お客さんを招いた花婿と花嫁でしょうか。あるいは婚礼の世話役でしょうか。また、マリアさまの言葉に従い、しかもイエスさまの命令に応じていった召し使いたちでしょうか。

オリエンズ宗教研研究所から出ている『聖書と典礼』の扉の絵を眺めながら、あれこれ思い巡らしてみました。婚礼を祝うお客さんたちは、よいぶどう酒がただ運ばれているのを喜んでいました。花婿と花嫁は視線を交わしながら、よいぶどう酒を味わっています。世話役は画面の中心に立って、ぶどう酒を驚きながら婚礼の客に手渡します。衣服の色は画面の上半分をおおっている淡いぶどう酒色です。召し使いはマリアさまの言葉を耳にしなが、イエスさまの命令を黙々と果たそうとしています。「二ないし三メトレテス入り」(6節)の石

の水がめが六つですから。水をくんで、水がめを満たすだけでも一仕事です。

教会での奉仕の務めをミニストリーと言います。奉仕という表現より、ミニストリーという言い回しがわたしは好きです。ミニストリーは小さいというミニに由来するからです。召し使いたちは小さくなって、身をかがめて一生懸命にイエスさまの命令に従います。同じように教会のミニストリーもイエスさまに従って働くのです。第二朗読にあるように霊は「カリスマ」をそれぞれの人に与えています。しかし、それはミニストリーとして尽くすためなのだと思います。シノドスの教会とは、教会に集う一人ひとりが、この召し使いたちのように自分に与えられた使命を生きる教会なのです。「カリスマ」を持ち寄って、教会は天国の宴をこの地上で先取りしていきます。

それでは、また来週。